
廃校の悪夢 その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃校の悪夢 その2

【Nコード】

N6941I

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

廃校になった母校に遊び半分で忍び込んだ同級生、六人。そこに待ち受ける恐怖の事件。

誰が？なんのために？

怪しい人物が主人公たちを追いつめる、。。。

作：青木弘樹

『お前たちは悪い人間だ。おしおきしてやる。ドアには鍵をかけた。警察に言ったら殺す』

「、、、」

そして、その下にはこう書かれてあった。

『図書室に來い』

「、、、」

五人は夢であつてほしいと思った。しかしこれは現実。あるいは悪夢なのか、、、？

はるなはピクリとも動かない。

「もう無理よ、どうすればいいの？」

えりが泣き出した。

「えり、、、」

「図書室へ行こう」

ナンナンが言った。

「そうだな。行くしかないよな、、、」

ボウズが言った。

「よし行こう！」

純が立ち上がった。

「みんな、懐中電灯はもう一つしかない。絶対に離れないようにな」
「分かった」

純は先頭に立ち、そして五人は歩き出した。えりとななはしっかりと手を握っている。

「きたぞ、、、」

五人は三階の図書室の前に着いた。

「ん？」

「どうした？ボウズ」

「ドアが開いてるぞ」

「なに！？」

見ると、確かにドアは少し開いていた。

「なるほど、、入れてわけだな」

ボウズが言った。

「、、、、」

えりは相変わらず震えていた。

「よし入るぞ」

純を先頭に五人は図書室に入った。暗い部屋。誰もいないようだった。

「誰もいないな、、」

純は懐中電灯であたりを照らしてみた。すると、

「あっ！」

なんと黒板に何か書かれている。こう書かれていた。

”今からひとりだけ、二階の職寝室に來い。ただし懐中電灯は使わない。指示に逆らったら命はない”

「、、、、」

五人は言葉も出なかった。

「なな」

えりはななに抱きついた。

「、、ふざけやがって、、よし！俺が行ってやるよ！」

ボウズは少し怒っていた。

「ボウズ、、」

「懐中電灯は使うな？おもしろい。指示に従ってやるよ」

「ボウズ、、危険だぞ」

「へっ、大丈夫さ。俺は中学まで空手やってたんだ。それに懐中電

灯を使わなけりやいいんだろ？」

そう言つと、ボウズはポケットからライターを取り出した。

「これならやつも文句ねえよな」

確かに黒板には、明かりになるものを一切使うとは書いていなかった。

「よし！じゃあ行つてくる。絶対にとつ捕まえてくるからよ！」

ボウズは勢いよく飛び出していった。

「純、、、」

ナンナンが純に問いかけた。

「いったい誰が、、、何のために、、、？」

「分からない、、、」

「、、、」

えりとななは黙っていた。

三十分ほどが過ぎた。しかしボウズは帰ってこなかった。

「、、、どうする？純」

「よし。こうなつたらみんなで行こう。こんなふざけた指示に従う必要なんてない」

「そうだな」

四人は二階に向かった。間もなくして二階の職員室前に着いた。

「ボウズは、、、中にいるのかな？」

四人はドアを見てみた。が、ドアは開いていなかった。

「あれ？開かないな」

その時、

”カランカラン！”

二階のトイレのほうから音がした。

「な、なんだ？」

四人は驚いた。

「行ってみよう！」

四人は二階のトイレのほうへと向かった。すると、そこには空き缶が落ちていた。空き缶にはメモらしき紙が差し込んであった。

「、、、」

純は缶を拾った。その時、ナンナンが声を上げた。

「あっ！」

ナンナンの目線を追うと、そこにははるなの死体（おそらく死体）の隣に横たわるボウズの姿があった。同じようにフルフェイスマスクを被らされている。今度のマスクは大仏のマスクだった。そして手には軍手。

「ボウズ、、、」

四人は愕然としていた。

「、、、」

えりは叫ぶことすら出来なかった。

「ねえ、もう出ましようよ。警察に言うしかないわ」

ななが言った。

「でも、警察に言ったら殺すって、、、」

「警察に言わなくなつて殺されるわ！」

ななが思わず叫んだ。

「けど、ドアには鍵をかけたって、さっき書いてあったぞ」

「そんなの鍵を壊せばいいじゃない！とにかく警察に通報するわ」

ななは携帯電話を取り出した。

「待て、なな」

純がななを止めた。

「警察には通報するな。もしかしたら見られてるかもしれない。もしたら何らかの方法で今すぐ皆殺しにされるかもしれない。だからまず外に出よう」

「、、、分かったわ」

ななは携帯電話をしまった。そして純は空き缶に入っていたメモを見てみた。

「、、、くそっ！」

純は思わず言った。そこにはこう書かれてあった。

”全員の携帯電話をここに置いていけ。さもなくば今すぐ全員殺す。

携帯電話を置いたら、再び図書室へ行け”

「こいつ、、、」

純たちは迷ったが、結局指示通り、携帯電話を置いた。

「むかつくやつだな、、、」

ナンナンが言った。その後、四人はとりあえず図書室へ戻った。

図書室に入ると、黒板に書かれていた文章が変わっていた。こう書かれていた。

” 男二人は1階へ行け。ゲームをしよう。一階のどこかに鍵を隠した。探してみる”

「、、、」

純は冷静だった、が、ナンナンはだんだん腹が立ってきた。

「なんのつもりなんだ、こいつは？」

ナンナンは怒っていた。

「廊下に隠しカメラでもあるのかもしれないな、、、」

「純、行こう。さつさと鍵を見つけて、外へ出るんだ。」

「そ、そうだな、、、」

「二人とも、行っちゃうの？」

えりが不安そうに言った。

「ああ、えりとななを残していくのは心配だが、仕方ない。けど大丈夫。絶対戻ってくるから」

純が力強く言った。

「純、、、分かったわ。信じて待ってる」

ななが言った。

「ああ。じゃあ行ってくるよ」

純とナンナンは1階へ向かった。

「しかし純、本当に鍵を置いてくれているのかな？」

「分からない。けど、行くしかないだろう」

二人は懐中電灯をかざしながら、足早に一階に向かった。

外に出られるドアは三箇所。そのすべてに何者かによって南京錠が付けられていた。

二人は一階に着いた。

「さあ、探そう」

「ああ」

二人はまず廊下を丹念に探した。

「ないな、、、」

教室の中を調べよと思ったが、教室のドアはすべて閉まっている。

「入れないな、、、」

「下駄箱のほうへ行ってみよう」

二人は下駄箱のある場所に着いた。

「ここにあるのか、、、それともどこにもないのか、、、」

と、その時、

”バサッ”

ナンナンの足元から網が持ち上がり、ナンナンを包み込んだ。

「ナンナン！」

ナンナンは網に包まれ、もがいていた。

「くそっ！」

ナンナンは悔しそうだった。

「大丈夫か？ナンナン！」

「くそっ！俺としたことが！純すまない、俺にかまわず鍵を探してくれ！」

「ナンナン、、、分かった。必ず後で助けてやるからな！」

「ああ、、、」

純は下駄箱を丹念に探した。

「くそっ、、、どこだ？どこにあるんだ？」

そして、

「あっ、あつた。あつたぞ！」

純は鍵を見つけた。

「ナンナン！あつたぞ！」

「本当か！？」

二人は少しだけうれしそうだった。

「よし純、上に行つてえりとななを連れてこい。俺は後でいいから」
「でも、、、」

「いいから行け！早く！」

「わ、分かった。すぐ戻ってくるからな！」

純は大急ぎで三階へ向かった。

”ガラガラガラ”

「えり！なな！あつ！」

図書室のドアを開け、懐中電灯を照らすと、そこにはななしがいなかった。そしてななはロープで縛られていた。

「なな！えりはどうした？」

「純、恐かった、、、恐かったよー！」

ななは純に抱きついた。

「なな！えりはどうしたんだ？」

「さつきね、ナイフを持った人が入ってきて、私たちを縛って、、えりは、、えりは、、」

「えりは！？」

「どこかへ連れて行かれちゃったよー」

「そんな、、」

「えり」

ななは泣いていた。

「えり、、」

純はななをそつと抱きしめた。そしてロープを解いた。

「なな、聞いてくれ。鍵は見つかった。けど、ナンナンが畏にかかっ
つてさ」

「畏？」

「ああ、網の畏があつたんだ。一階で網にくるまつてる。早く行つてあげなきゃ」

「でもえりは？」

「えりも心配だが、とにかくここを出よう。そしてすぐ警察に連絡するんだ」

「、、、そうね。分かったわ」
純はななの手を握り締めた。

「、、、」

二人は少しドキドキしていた。

「よし行くぞ」

「うん」

二人は二階に下りた。

「ところでなな、そいつ、どんなやつだった？」

「分からないわ。暗かったし、フルフェイスのヘルメット被ってたし、、、」

「服装は？」

「さあ、、、分からないわ。声も出さなかった。指示を書いたメモを見せてきたの」

「どんな指示だ？」

「私にえりを縛れって。そして私はその人に縛られたの」

「そうか、、、」

間もなくして、純とななは二階のトレイの前に差し掛かった。その時、

「ん？」

「どうしたの？純」

「おかしいぞ、、、ボウズの死体（おそらく死体）が、なくなってる、、、」

「本当だ、、、」

「いったいどういうことだ？」

その時、

「つつ！」

ななが首筋を押さえた。そして、
”タッタッタッタ”

何者かが、走り去っていった。

「誰だ！？」

「うつ、ゝ、ゝ」

ななはひざをつき、そして手をついた。

「なな！なな！」

ななは目をつぶり倒れた。おそらく麻酔だろう。ななは眠ってしまった。

「くそう！」

純はななをおんぶし、一階に向かった。

「ナンナン！」

純は下駄箱のほうへと向かった。

「ナンナン、ゝゝはっ！」

見ると、ナンナンも眠らされていた。

「ナンナン！」

純はななをそつとおろし、ゆっくり寝かせた。

「くそー、いつたい何なんだ？」

純は大声をあげた。

「何が目的だ？出てきやがれ、ちくしょう！」

純は下駄箱を蹴った。

「ふふふふ、ゝゝ」

その時、声が聞こえた。声は機械的に変調されていた。

「誰だ！？」

「私はいつたい誰でしょう？」

声に変調されているので、誰だか分からない。まあ知り合いとも限らないが。

「なぜこんなことをする？姿を現せ！」

「ふふふふ、二階の職員室の外にあるロッカーを調べてみる」

声の主は、純の問いかけに応えることもなく、たんと喋った。

「二階のロッカー？」

「ゝゝゝゝ」

声の主は黙っていた。

「くそっ！」

純はとりあえず行ってみることにした。二階に着いた純はロッカーを探した。

「あつた！」

そこには縦長いロッカーが三つあつた。

「なにがあるんだ、」

純は一番左のロッカーを開けてみた。しかし、何もなかった。

「、、、、」

次に純は真ん中のロッカーを開けてみた。

「わっ！」

中からホウキが倒れてきた。

「ふざけやがつて、、」

純は一番右のロッカーを開けてみた。すると、

「うわっ！」

なんとえりが倒れてきた。えりはロープで縛られ、眠らされている。

「えり！えり！」

とその時、

「ふふふ、驚いたかい？」

また例の声が聞こえた。

「お前、いったい何がしたいんだよ！」

純は叫んだ。

「これはゲームだよ、純、、」

「！！」

声の主は純と言った。知り合いなのか？違うのか？純は動揺したが、なんとか落ち着き、えりのロープを解いた。純はえりを背負い、とりあえず一階に向かった。鍵を使って外へ出て、警察を呼ぶためだ。

しかし純は思った。声の主はボウズなんじゃないかと。

はるなは二階で死んでいる。ナンナンとななとえりは一階で眠っている。ボウズは二階で死んでいたが、今はいなくなっている。ボ

ウズは実は生きているんじゃないか？そう思った。

しかもだ、そもそもここに来ようと提案したのはボウズだ。肝試しを提案したのもボウズ。

しかし問題ははるなをどうやって殺したかだ。はるなが肝試しの最中、ボウズはずっと俺たちと一緒にいた。いったいどうやって？しかし声の主がボウズだと決まったわけじゃない。純はとにかく外に出て、公衆電話で警察を呼ぼうと思った。

しかし、、

「くそ」

鍵はどのドアも開けることが出来なかった。

「人をおちよくりやがって、、！」

純は三人（ナンナン、なな、えり）のところへ戻った。

「みんな、、」

三人はよく眠っている。起きそうにない。その時、

「純、、」

またあの声が現れた。

「純、私が誰だか分かるかな？」

「、、」

純は答えなかった。

「ヒントをあげよう。犯人がひとりだとは限らない、、」

その後、沈黙が続いた。

「はっ！」

純は思い出した。今日の集まりはそもそも七人のはずだった。来れなくなったのは加藤栄太。同じく同級生で、ボウズの親友だ。

「まさか、、」

純は思った。実は栄太はここに来ていて、いろんな罠を仕掛けた。はるなを殺したのは栄太なのではないかと。

一番最初に図書室に集められたとき、図書室から外へ出て行ったのはボウズだ。ボウズは死んだふりをし、その後、栄太と二人で行動していたのではないのか？あくまで憶測だが、、。

「私が誰か、、分かったかい？」

「、、、、ああ」

「ほう」

「確信はしていないが、、お前は、、ボウズなんじゃないのか？」

その3へ続く、、。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941i/>

廃校の悪夢 その2

2010年10月8日15時17分発行